

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24500713

研究課題名(和文) 舞踊技法の特性と伝承法に関する琉韓身体文化の比較

研究課題名(英文) Comparison between Ryukyuan and Korean Body Cultures on Characteristics and the Tradition of Dancing Techniques

研究代表者

波照間 永子 (HATERUMA, NAGAKO)

明治大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：80336487

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、申請者がこれまで着手してきた「琉球舞踊の総合的データベース構築事業」(動作単元データベースおよびオーラル・ヒストリー映像アーカイブ)で抽出した指標を用い、琉球舞踊と韓国舞踊との比較を企図したものである。今回、「韓国舞踊との比較」という新たな視点を導入することで、琉球舞踊の特性をより明確にするとともに、琉球と韓国双方の王朝期と近代期の舞踊技法の共通点と相違点の抽出を試みた。あわせて、近現代に活躍した女性舞踊家による伝承法の成立・展開の過程を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study is to propose a comparison between Ryukyuan Dancing and Korean Dancing by using an index extracted from the "Project to Develop the Comprehensive Database for Ryukyuan Dancing" (Movement Database and Image Archive for Oral History) that has been conducted by the author. A new viewpoint "Comparison with Korean Dancing" was introduced this time to more clarify the characteristics of Ryukyuan Dancing. Common points and differences between dynasty and modern ages of Ryukyu and Korea were also tried to be extracted. Additionally, the process of creating and developing the tradition by modern and contemporary female dancers was also revealed.

研究分野：身体教育学(舞踊教育学)

キーワード：舞踊学 美学・芸術学 身体教育学 国際研究交流 琉球舞踊 沖縄舞踊 韓国舞踊 身体技法

1. 研究開始当初の背景

琉球王朝時代、沖縄は、中国・日本・朝鮮をはじめ東南アジア地域と交流し、当地の文化を摂取融合した独自の文化を築いたとされる。琉球舞踊はこれまで、中国や日本の影響が特に強いといわれてきたが、衣装に着目すると、朝鮮(韓国)舞踊との類似性が示唆される(矢野1994)。

また、歴史的背景と対応する舞踊ジャンルの展開も類似する過程を経てきた。琉球・韓国ともに王朝時代には、中国に朝貢し東南アジア地域で交易を行い、古典的様式である

「宮廷舞踊」が開花した。その後は両者ともに日本に組み込まれ、新たなジャンル「雑踊り」(沖縄)と「新舞踊」(韓国)が生まれ、戦後はさらに「創作舞踊」へと展開した。

2. 研究の目的

このような舞踊の史的展開の共通性を踏まえ、(1)王朝期の舞踊技法の比較、(2)近代期の舞踊技法の比較、(3)近現代期における舞踊の伝承法の成立と展開、の三点を明らかにすることを本研究の主たる目的とした。以下にそれぞれの目的の概要を記す。

(1) 王朝期の舞踊技法の比較 (2012年度)

王朝期の舞踊における主要演目の中から「袖を用いる技法」を対象に、その動作特性と表現特性を見出し比較する。

(2) 近代期の舞踊技法の比較 (2013年度)

近代期の舞踊における主要演目の中から「手ぬぐい(布)を用いる技法」を対象に、手ぬぐいの持つ象徴性とそれを用いる技法の動作特性を比較する。

(3) 近現代期における舞踊の伝承法の成立と展開 (2014年度～2015年度)

近現代期に活躍した女性舞踊家による舞踊伝承の実態を整理する。

このほか、関連研究として琉球と韓国の綱引き文化の調査も行う。

3. 研究の方法

琉球舞踊は代表者の波照間が担当し、韓国

舞踊は研究協力者の金采源氏・李鍾淑氏・金怜姫・田銀子氏(成均館大学校)らが担当した。以下に年度ごとの方法を記す。

(1) 王朝期の舞踊技法の比較 (2012年度)

主要な宮廷舞踊の演目から「袖を用いる技法」(韓国舞踊の「袖」は「ハンサム」と呼ばれる)を抽出し、左右上肢の使い方と袖の操作性を指標に動作を分析・分類した。琉球舞踊は歌詞と動作の対応関係から表現特性を抽出し、韓国舞踊は歌詞がない伴奏音楽で演じられる抽象的表現であるため、表現の根底にある世界観を含め考察した。

(2) 近代期の舞踊技法の比較 (2013年度)

主要な近代期の舞踊(琉球舞踊「雑踊り」・韓国舞踊「新舞踊」)の演目から、手ぬぐい(琉球舞踊「手巾(ていさじ)」・韓国舞踊「スゴン」)を用いる技法を抽出し、左右上肢の使い方と手ぬぐいの操作性を指標に動作を分析・分類した。さらに王朝期の舞踊技法と同様の方法で表現特性を抽出するとともに、手ぬぐいそのものの象徴性についても考察した。

(3) 近現代期における舞踊の伝承法の成立と展開 (2014年度～2015年度)

近現代期の舞踊伝承を共通課題とした。琉球舞踊は、士族男子の外交職務として王朝期に誕生・発展した舞踊であったが、王朝崩壊後は女性舞踊家が主たる担い手となった。その経緯を、先行研究や新聞記事、戦前より活躍する女性舞踊家への聞き取り調査から明らかにした。韓国舞踊は、同時代の「芸妓による舞踊伝承」と「無形文化財制度における舞踊伝承の実態」について、先行研究の分析および実践者(当事者)の視点から踏査した。

関連研究として、琉球と韓国の綱引きの調査を研究分担者の瀬戸邦弘氏(上智大学)が実施した。

4. 研究成果

以下に年度ごとの研究成果を記す。

(1) 2012年度の成果

①王朝期の舞踊における「袖を用いる技法」の比較

琉球舞踊では長く「垂れた袂」、とりわけ左袖の袂に、韓国舞踊では「ハンサム」と呼ばれる手を隠すための細長い袖に表現の重きを置いている。その背景にある両者の信仰、宗教、世界観を比較考察し、衣装の調査結果とともに、比較舞踊学会大会（12月8日、早稲田大学）にて発表した。また、本成果を明治大学公開講座「海域アジアにおける琉球・朝鮮の交流と舞踊文化」（3月30日、）として実施した。

②琉球舞踊の基層にある信仰と身体文化

琉球舞踊の基層にあるシャーマニズム、ニライカナイ信仰、をなり神信仰、鳥信仰などが、祭祀や舞踊の身体にいかにかに表象されているかを考察し、大韓舞踊学会にて報告した。本成果の一部を「琉球舞踊における身体表現と信仰」と題する論考にまとめた。

(2) 2013年度の成果

①近代期の舞踊における「手ぬぐいを用いる技法」の比較

琉球・韓国ともに近代に焦点をあて、共通に用いられる小道具「手ぬぐい」の象徴性と技法について調査した。その成果を比較舞踊学会大会（11月30日、東海大学）のシンポジウムにて公表するとともに、同学会誌（『比較舞踊研究』第20巻：52-60）に執筆した。あわせて、本研究結果を踏まえた現代舞踊を創作しソウルで発表した（3月15日、成均館大学校）。作品創作に際して、公益財団法人日韓文化交流基金の助成を得た。

②近代期の舞踊にみる外来要素の導入

韓国の近代期の舞踊「新舞踊」は、モダンダンスの影響で洋舞的要素が強く反映しているという特徴が見られた。琉球舞踊のほうは、一般的に洋舞的要素は希薄であるが、伊

良波尹吉作『南洋浜千鳥』にバレエの技法が導入されていた。同作品が誕生した背景と作品分析を通して、琉球舞踊に外来の要素が導入されるプロセスを明らかにした。その成果を論文「踊り継がれるミクロネシア“南洋群島”の表象—伊良波尹吉作『南洋浜千鳥』をめぐって—」（『文化人類学研究』第14巻）にまとめた。

③琉球における武術と舞踊の比較研究

ソリドワル・マーヤ氏（明治大学ポスドクター、現在：津田塾大学専任講師）の協力を得て、琉球王朝尚家に伝わる武術「本部御殿手」と舞踊の比較研究を行った。その成果を日本スポーツ人類学会にて報告した（3月29日、東京学芸大学）。

(3) 2014年度～2015年度の成果

①近現代期の舞踊伝承に関する研究

2014年度は、琉球・韓国ともに近現代に焦点をあて、特に戦前・戦後を生きた女性舞踊家らによる舞踊伝承の特性を調査した。その成果を明治大学大学院情報コミュニケーション研究科主催国際シンポジウム「東アジア表象メディアの創出と伝承」（2015年3月16日、明治大学）にて公表するとともに、同シンポジウム予稿集に3本の論文概要「戦前・戦後における琉球舞踊の伝承 —『男芸』から『女芸』へ—」（波照間）、「韓国近現代期の芸妓による舞踊伝承」（金采嫻）、「韓国無形文化財〈僧の舞〉に関する研究」（田）を掲載した。

②沖縄女性史における琉球舞踊家研究

2015年度は、前年度に手がけた琉球の女性舞踊家らによる舞踊伝承の足跡をさらに深めて調査し、沖縄女性史のなかに位置付けた。その成果を舞踊学会定例研究会シンポジウム「アジアにおける伝統の再創造と再構築」（2015年6月7日、日本大学）にて公表す

るとともに、学術機関誌『舞踊学』38号に『『男芸』から『女芸』へ — 女性舞踊家のオーラル・ヒストリー —』と題する論考として公開した。

なお、同論考は、「琉球舞踊における『女芸』の成立と展開」『沖縄県史 各論編8 女性史』（2016年3月刊行、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編）所収の論文を加筆・修正したものである。

③琉球と韓国の綱引き文化の比較

韓国綱引き文化との比較研究のために沖縄県渡名喜島、那覇における民俗綱引き行事を対象に綱引き行事の全般（綱づくり、綱引き、綱引きの歌、付帯行事、観光化、文化財）を調査した。特に渡名喜島では地域民俗行事としての綱引きを、那覇では文化財、観光コンテンツとしての綱引きの様子を研究している。その結果を上記(3)-①の国際シンポジウムにて報告した。現在スポーツ言語学会学会誌に論文「“共通語的土地ことば”として伝統を繋ぐ民族スポーツ」として執筆中である。

課題

明治大学にて国際会議「日韓若手女性研究者フォーラム 身体・表象・ジェンダー」（2015年11月6-7日）を実施した。同フォーラムにて朴ナニョン氏が発表した研究を受けて、今後は、日韓の扇子を使った舞踊を共通テーマとし2016年度以後、比較研究をすることが決定している。

本課題実施の4年間、国際シンポジウム、学会発表、および関連ワークショップ等を日韓両国で継続して実施し、共同研究体制の構築が促進された。今後は琉球・韓国ともに歴史的・文化的に関わりのあった中国舞踊も含めて精査し、これまでの成果を雑誌論文として公表する必要性が強く示唆された。

<引用文献>

矢野輝雄：「琉球古典舞踊に見る文化の重層性」『沖縄県立芸術大学紀要』2：81-89、1994年

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

- ① 波照間永子 『『男芸』から『女芸』へ — 女性舞踊家のオーラル・ヒストリー —』『舞踊学』38号：p. 146- p. 154、2015年3月（査読なし）…シンポジウム口頭報告を論文形式に改稿
- ② 波照間永子・金采嫻・三田徳明「環太平洋的視点からみた舞踊の上肢動作：シンポジウム報告『アジアの舞踊と身体文化』」『比較舞踊研究』第20巻：p. 52-p. 60、2014年1月（査読なし）…シンポジウム口頭報告を論文形式に改稿
- ③ 波照間永子 「踊り継がれるミクロネシア“南洋群島”の表象—伊良波尹吉作『南洋浜千鳥』をめぐって—」『文化人類学研究』第14巻：p. 20-p. 40、2013年12月（査読あり）

[学会発表] (計11件)

- ① 波照間永子 『『男芸』（女形）から『女芸』へ — 女性舞踊家のオーラル・ヒストリー —』舞踊学会第20回定例研究会 若手研究者によるシンポジウム「アジアにおける伝統の再創造と再構築」、日本大学江古田キャンパス、2015年6月7日
- ② 波照間永子 「沖縄近現代に創出された“武の舞”の諸相—琉球古武術「浜千鳥」と琉球舞踊「護身の舞」—」日本体育学会第65回大会スポーツ人類学専門領域シンポジウム「芸能のまなざし—スポーツ人類学における日本芸能論の可能性—」岩手大学、2014年8月27日
- ③ 波照間永子 「琉球舞踊と琉球古武術「本部御殿手」の比較—武の舞「浜千鳥」と雑踊り「浜千鳥」の動作分析を通して—」

- 日本スポーツ人類学会第15回大会、2014年3月28日
- ④ 波照間永子・志田真木「沖縄の「雑踊り」にみる“手巾”の象徴性と技法」比較舞踊学会第24回大会、東海大学高輪キャンパス、2013年11月30日
- ⑤ 金采姫・李鍾淑・田銀子「韓国の新舞踊にみる“スゴン”の象徴性と技法」比較舞踊学会第24回大会、東海大学高輪キャンパス、2013年11月30日
- ⑥ 波照間永子「琉球古典舞踊の「袖の扱い」にみる男と女」日本スポーツ人類学会第14回大会、金沢大学、2013年3月24日
- ⑦ 波照間永子「沖縄の歌謡と舞踊における南洋群島・ミクロネシア」早稲田文化シンポジウム「スポーツ人類学の現在」（招待講演）、早稲田大学、2013年1月26日
- ⑧ 波照間永子・志田真木「琉球舞踊における袖の表現－韓国舞踊との比較をめざして－」比較舞踊学会第23回大会、早稲田大学所沢キャンパス、2012年12月08日
- ⑨ 金采姫・田銀子・李鍾淑「韓国舞踊における袖の表現」比較舞踊学会第23回大会、早稲田大学所沢キャンパス、2012年12月08日
- ⑩ 波照間永子・金采姫「沖縄の旅・航海における鳥信仰と身体表現」大韓舞踊学会「韓国の舞・世界の舞」（招待講演）西江大学校メアリーホール、ソウル、2012年10月24日
- ⑪ 波照間永子「沖縄芸能におけるミクロネシア・南洋群島」日本体育学会第63回大会、東海大学、2012年8月24日

〔図書〕（計4件）

- ① 波照間永子「琉球舞踊における『女芸』の成立と展開」沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編8 女性史』：p.190-p.208、2016年3月（総ページ1-604、他年表・索引等）

- ② 波照間永子「沖縄の歌と踊りにみる南洋群島－『南洋浜千鳥』に表象される文化の重層性」瀬戸邦弘・杉山千鶴編『近代日本の身体表象－演じる身体・競う身体』[叢書・文化学の越境②]：p.87-p.112、2013年9月（総ページ数1-314）
- ③ 波照間永子「琉球舞踊における身体表現と信仰」（お茶の水ヒューマンライフシステム研究会編『家族と生活－これからの時代を生きる人々』：p.210-p.224、2013年3月（総ページ数1-228）
- ④ 瀬戸邦弘、杉山千鶴、波照間永子編著『日本人のからだ再考』明和出版、2012年5月（総ページ数.1-151）

〔その他〕

- ① 国際シンポジウム報告・予稿
『明治大学情報コミュニケーション研究科フォーラム：戦後70年国際シンポジウム 東アジア表象メディアの創出と伝承～沖縄・台湾・韓国、そして日本の戦前・戦後～ 予稿集』（2015年3月）に下記4本の報告を掲載した。
- ・波照間永子「戦前・戦後における琉球舞踊の伝承－『男芸』から『女芸』へ－」：p.63-p.78
 - ・瀬戸邦弘「表象メディアとしての綱引き文化」：p.27-p.32
 - ・金采姫「韓国近現代期の芸妓による舞踊伝承」：p.79-p.83
 - ・田銀子「韓国無形文化財〈僧の舞〉に関する研究」：p.84-p.94
- ② 研究成果の一般公開
- ・〈明治大学リバティアカデミー公開講座〉波照間永子・真栄平房昭・志田真木・金チェウォン「海域アジアにおける琉球・韓国の交流と舞踊文化」、明治大学大学会館、2013年3月30日
 - ・〈科研費成果報告会〉「琉球・韓国 身体文化の比較」2013、成均館大学校（ソウル）、2014年3月15日

③ 研究成果関連ワークショップ

・波照間永子・志田真木・田銀子「琉韓身体文化ワークショップⅡ～近代の舞踊にみる「手巾」の象徴性と技法～」比較舞踊学会第24回大会、東海大学所沢キャンパス、2013年11月30日

・波照間永子・志田真木「琉球舞踊ワークショップ」(手ぬぐいを用いた演目)成均館大学校芸術学部舞踊学科特別授業、成均館大学校(ソウル)、2013年3月11日

・波照間永子・志田真木・金チェウオン・田銀子他「琉韓身体文化ワークショップー舞踊にみる袖の表現ー」比較舞踊学会第23回大会、早稲田大学所沢キャンパス、2012年12月26日

④ 国際シンポジウム報告

・Park Nan Young “The Technique and Symbol of Korea’s Intangible Cultural ‘Buchechum’ ” Japanese and Koran Young Female Forum for studies on Body, Representation, and Gender, Nov. 6-7, Meiji University, Tokyo.

⑤ 「スポーツ人類学の現在」討論記録

瀬戸邦弘・寒川恒夫・波照間永子・小木曾航平「スポーツ人類学の現在」『文化人類学研究』第14巻：p. 55-p. 68、2013年12月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

波照間 永子 (HATERUMA NAGAKO)
明治大学・情報コミュニケーション学部・准教授
研究者番号：80336487

(2) 研究分担者

瀬戸邦弘 (SETO KUNIHIRO)
上智大学・文学部・講師
研究者番号：40434344

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

田銀子 (JUN EUN JA)
成均館大学校・芸術学部・教授

金采嫻 (KIM CHAE WON)
成均館大学校・芸術学部・非常勤講師
明治大学特定課題ユニット・身体コミュニケーション研究所・研究推進員

朴ナニョン (PARK NAN YOUNG)
成均館大学校・芸術学部・非常勤講師

李鍾淑 (LEE JONG SOOK)
成均館大学校・芸術学部・非常勤講師

金怜姫 (KIM YEONG HUI)
韓国舞踊批評家協会

志田真木
琉球舞踊 重踊流・二世宗家